



発話行為から捉える現代日本語文法一丁寧形コンピュータ周辺事象の考察一

乙武, 香里

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5810

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005810>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

論文要旨

氏名 乙武香里

専攻 グローバル文化

指導教員氏名 定延利之 教授

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

発話行為から捉える現代日本語文法 —丁寧形コピュラ周辺事象の考察—

論文要旨

この論文は、現代日本語の発話行為について考察したものである。発話行為とは、発話することによって同時に為される行為のことを指す。発話行為の視点から分析することで、従来よりも詳細な話しことば文法の記述が可能になると考え、文法と発話行為の顕現、発話の質、発話計画、話し手らしさの関係について考察した。各章において分析の対象としたのは、丁寧形コピュラのデスにまつわる現象である。

第2章は、前提とするコミュニケーションに対する考え方を述べている。本論文は言語を研究する上で暗黙裡にされている伝達的なコミュニケーション観に疑問を抱いている。Searl(1969)によって促進されたコミュニケーション研究は発話行為を首尾よく遂行する原理を問い、伝達の成立を前提としてきた。しかしながら、我々の日常的なコミュニケーションには伝達の成立が見出せない事例がある。伝達的コミュニケーション観だけでは説明できない事例を紹介するとともに、伝達モデルの問題点を指摘した。第2章で示す前提は、具体的な観察・考察の基盤となっている。

第3章では、形容詞を「です」で結ぶ言い方と「きもち」(Sadanobu & Sawada 2005)の補強による発話行為の顕現の関係について述べる。「形容詞過去形+です」の発話が特に不自然に感じられるのは、形容詞の過去形を含む発話が「体験」の表現として発せられやすいからで、この場合、特に終助詞によって発話行為が顕現する必要がある。終助詞「よ」の付加に関しては、「教える」という発話行為が明確になることで「形容詞過去形+です」の発話が自然になる。また、状況から「教える」という枠組みが与えられている場合は、「よ」が不適切になる。終助詞「ね」が加わる場合は、「自己確認」という発話行為が顕現することから、自然な発話となる。「よ」、「ね」のいずれにおいても、「きもち」が示されることで、すなわち、発話行為が顕現・明確化することで不自然さが解消される。いずれの場合も、韻律の時間長の延びで「きもち」がより強まることを示す。

第4章では、聞き手も環境の一部であると解釈し、話し手と環境とのインタラクションの中の、話し手と聞き手とのインタラクションに関わる部分を考察した。ここでも、「形容詞過去形+です」の不自然さを出発点として考察を進めたが、この発話は、話者の過去の体験の個人的度合いの高さ、つまり、話し手オリジナルの経験としての意味合いの強さによって自然になることがわかった。ここで考察した「形容詞過去形+んです」の発話が「過去の体験を語る」行為の発話であるとすれば、この発話行為には発話の個人性という発話の質が要求されると考えられる。また、「とつても」、「意外に」、「ちょっと」といった副詞は、過去の経験が話者の個人的なものであるという聞こえを高め、結果として発話を自然なものにすることに作用していることがわかった。さらに、この章では現れる場面が類似し、また同時に現れることも多い終助詞「よ」と「んです」の微妙な違いも明らかにした。

第5章では、原因・理由節の「ですから」の自然な生起に注目し、従位接続であるカラ節が等位接続に近くなるという現象を、話者の発話計画から説明した。「ですから」は、平叙文、否定文、また疑問文においても常に非制限修飾節として主節からの独立性の高い状態で現れる。この特徴は、疑問文において文の自然さに相違を示す。このことから、原因や理由を問うという行為は、一つの発話計画で為されるような構造の訊ね方が求められるということを導いた。また、「ですから」とその後続の主節が一つの発話計画で為されないときに「ですから」が自然に生起する事例を挙げ、「ですから」という言い方が話者の行為と心内行動を反映して現れるということを示した。この章では、言語を動的に捉えることで、人がことばを産出するという過程を通じ、話しことばにおける文らしさが決まるということを示す。

第6章では、条件節の一つであるタラ節に現れるデスの自然さを考察した。考察は、『上品な女性』キャラクタを想定しておこなった。意味論の側面と語用論の側面を整理し、常に上品さを保とうとする話し手の発言であっても、反実仮想における「でしたら」は、自分自身についての言及では丁寧な言い回し那不自然になるということ、自分自身のことに関する反実仮想とまったく同じ形式であっても、それが対話の相手から得た情報を受容しての仮定の意味になると自然さが上がることを示した。「でしたら」と意味が重複するノダッタラを分析に加え、『上品な女性』の丁寧な態度は「仮定する」という行為に係っているということを示した。発話末のデス・マスだけでなく、従属節で示される「聞き手の発言を受容する」という行為でも丁寧さが現れることが明らかになり、発話とともに丁寧にふるまうということの詳細が確認できた。また、発話行為の単位で発話キャラクタが現れるということがわかった。

論文審査の結果の要旨

氏名	乙 武 香 里		
論文題目	発話行為から捉える現代日本語文法 ——丁寧形コンピュータ周辺事象の考察——		
判定	合 格・不 合 格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	林 博 司
	副査	東北大学内務学 科 教授	友 定 賢 治
	副査	教授	定 延 利 之
	副査		印
	副査		印
要 旨			
<p>学位申請者・乙武香里氏の論文「発話行為から捉える現代日本語文法——丁寧形コンピュータ周辺事象の考察——」は、伝統的に支持されている静的な文法観を前提としない、新しい文法のあり方を切り開こうとした試みである。従来、こうした試みは、意味論と語用論を合一しようとする試みとして、海外の一部の研究者（たとえば Anna Wierzbicka 氏）によって理論的なレベルでなされてきているものではあるが、現代日本語の記述文法を対象として実証的に、本論文のような規模で展開された例はこれまでに無い。</p> <p>本論文の直接の考察対象である現代日本語のコンピュータ「です」は、共通語としての歴史が長く、特に形容詞に後接する場合にその不自然さがしばしば指摘されてきたものである。乙武氏はこれを、形容詞だけでなくさまざまな言語表現との接合可能性の問題として一般化した上で、発話を動機づけるきもちの問題ととらえている。このような試みは、状況と密着したコミュニケーションの中で文法論の確立をはかった、きわめて意義深いものである。</p> <p>以上のような背景と意義を持つ本論文は、7つの章から成る構成をとっている。そのうち第1章は序論で、本論文の背景や意義、さらに具体的な考察対象が述べられている。続く第2章は考察の前提をなす部分で、伝統的なコミュニケーション視ひいては文法観が批判的に検討されている。第7章は結論部で、各章で得られた知見が短くまとめられ、今後の展開や日本語教育などへの応用可能性が述べられている。本論文の中心をなすのは第3章～第6章であって、</p>			

そのうち第3章と第4章は主節におけるコンピュータ「です」と形容詞述語との接合可能性、第5章と第6章は従属節におけるコンピュータ「です」と従属節表現との接合可能性を取り上げている。以下、これらの章の概要を順に述べる。

第3章はたとえば「寒かったです」と比べて「寒かったですね」などがより自然であることを扱った章である。形容詞述語がいわゆる叙述的意味を含有するという前提的観察に続いて、発話を動機づけるきもちが言語表現として顕現することと自然さの対応が論じられている。体験と知識の区分がそうした自然さに関わることも、そのようなきもちの顕現如何の問題として処理されている。

第4章はたとえば「寒かったです」と比べて「寒かったんです」のようないわゆる「のだ」述語が文の自然さを高めることを扱ったものである。ここでは結果として、「のだ」述語の背後にある話し手の披瀝的態度が前章の体験と同様の効果を持つという観察がなされており、乙武氏の論じる「きもちと文法」の関係が、乙武氏の想定を越えて広範な領域にまで拡張可能であることを伺わせる、興味深い観察が展開されている。

第5章では原因・理由節におけるコンピュータ「です」が扱われており、たとえば「雨ですから中止ですか」という文が、上品な発話キャラクタの話し手が「雨であるから中止だ」という論理を咀嚼しながら発話するような場合に自然になり得ることを取り上げたもので、「時間の経過」という動的な観点がこれまでの発話行為論や文法論から脱落していたことの指摘につながる重要な観察を含んでいる。

第6章では条件節におけるコンピュータ「です」が扱われており、たとえば「私も優秀でしたらいいのですが」という条件節の自然さがやや低いということが取り上げられ、仮定を丁寧になすことと、話し手自身に関する反実仮想が合わないという形で説明されている。

本論文は、言語の研究と教育において重要であるにもかかわらず周辺視されていた文法と発話の関係について、その実態を、現代日本語共通語のコンピュータ「です」とさまざまな言語表現との接合可能性に即して研究したものであり、状況と密着したコミュニケーションの中の文法のあり方、そして教育への応用について、重要な知見を得た価値ある考察の集積である。よって、本審査委員会は全員一致で、学位申請者の乙武香里氏は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお、申請者は申請に先立ち、博士後期課程在学中に以下のように学術論文1編（[1]）と国際会議での口頭発表3件（[2][3][4]）を発表していることを最後に申し添えておく。（[1]～[4]はいずれも査読付きである）。

- [1] 乙武香里 (2011) 「発話主体の認知行動から考える「のだから」」 劉利国・宮佛（編）『日本文化論叢』6, pp. 488-500. 大連理工大学出版社.
- [2] 乙武香里 「従属節における丁寧体コンピュータの自然さ——統語環境と役割語の濃淡——」 第九回国際日本語教育・日本語研究シンポジウム, 2012年11月, 香港城市大学, 中国.
- [3] 乙武香里 「ノダと思考作用の時間」 世界日本語教育研究大会, 2011年8月, 天津外国語大学, 中国.
- [4] 乙武香里 「発話主体の認知行動から考える「のだから」」 中国日語教学研究会 2010年度年会・第6回中日韓文化教育研究フォーラム, 2010年9月, 大連外国語学院, 中国.

以上